新年を迎えて

会長　飯塚弘志

新年明けましておめでとうございます。皆様にはお揃いで新しき良き年をお迎えになられたことと思います。

さて、決まり文句で書きだしてみたが、新しい年は間違いないが、本当に良い年になるのか、はなはだ疑問である。

失われた10年の恢復を求め、21世紀を迎えた。先行き不透明な閉塞状況の中、大きな期待を持って小泉内閣が登場した。「聖域なき構造改革」を旗印に世に広く支持された。

しかし、はや1年半余り経つが、掛け声だけで、一向に変わらない。変わらないどころか、世の中、ますます悪い方向へと向かっている。経済はデフレスパイラルへと突入し、自殺者も急増している。

痛みを分かち合うことには異論はないが、しかしその痛みがどの程度の痛みなのか、そしていつまで我慢をすればよいのか、先がまったく見えてこない。それが示されない。我慢にも限度がある。

三方一両損と称しているが、国は一両どころか、一銭も損をしていない。痛みを分かち合っていない。一方的に国民と医療提供者だけが痛みを強いられている。

痛みを強いるなら、今こそ国民が安心して安全に生活できるセーフティネットとしての社会保障の充実が必要である。国民の生存権を保障しなければならない。

昨年4月の診療報酬改定、さらに、追い討ちをかけて10月の高齢者医療の完全定率実施、種々の減算等々により多くの医療機関は瀕死の状況にある。

医業経営はまさしく危殆に瀕している。身も心もまさに厳寒の中にさらされ、うち震えている思いである。

吉田松陰の辞世の句「かくすれば、かくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂。」なんてどこかへ吹っ飛んでしまっている。

さらにはこの4月からの被保険者本人の三割負担実施、絶望的である。

しかしながら嘆いてばかりはいられない。その怒りをエネルギーに変え、高齢者負担の軽減、被保険者本人の三割負担実施阻止へ向けての運動を展開していかなければならない。

過日、日本医師会、日本歯科医師会、日本薬剤師会、日本看護協会の四師会がこれら運動展開へ向けての共闘体制をとり共同宣言を行っている。われわれも北海道選出の国会議員等に向けて、強力にアピールしていかなければならない。

われわれには国民の健康権を守る責務がある。

会員諸先生と手を携え、国民の味方になって、国民と共に共闘していかなければならない。

昨年来、北海道医師会の事業計画の第一に、医の倫理の高揚を謳っている。

近年とみに会員の不祥事が続いている。中でも医療保険に関わる不祥事が続発している。

「開かれた医師会。信頼される医師会」を旗印にあげてきた。このような不祥事続きでは信頼される医師会どころではない。まず自らの身を浄くしてはじめて信頼されるのである。

医の倫理の高揚を高く叫ばなければならないこと自体が異様とも言えるが、しかし叫ばざるを得ない。ほんの一握りの会員ではあるが、そのために数多くの先生達の信頼を失わしめ、医師会の信頼を失わしめている。

強く自浄作用が求められる。

以上、泣き事に終始した年頭の挨拶でありました。「寒さにふるえた者ほど太陽の暖かさを感じる」を実感したいものである。

会員諸兄の御指導、御鞭撻を今後ともお願いする次第である。